

書評

松村昌家著『大英帝国博覧会の歴史—ロンドン・マンチエスター二都物語—』(ミネルヴァ書房、2014年)



川本 真浩

本書は、約 30 年前に『水晶宮物語—ロンドン万国博覧会—一八五一』を世に送り出した著者による新著である。新著と言っても、著者自身が「まえがき」で述べるとおり、旧著を改訂・再編した Part1 と Part2 に、19 世紀半ばから 20 世紀初頭にかけてロンドンないしマンチェスターで開催された 3 つの博覧会をとりあげた Part3 から Part5 までを加えた 5 部構成からなる。

Part1「一八五一年ロンドン万国博覧会と水晶宮」では、産業革命期イギリス社会の変貌とそこに生まれた文学作品に言及しながら、美術協会による初期の展示会・博覧会事業、ヘンリー・コールやアルバート公らの発案と各方面への働きかけ、ジョゼフ・パクストンの考案による「水晶宮」の誕生、そして世界初の万国博の華々しい「成功」を描き出している。同博覧会の公式カタログやコールの自伝的著作『公共活動五〇年』によって開催前後の経緯や展示物が詳細にわたって語られるほか、『パンチ』『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』という当時の代表的なメディアに現れた情報を丹念に拾い集めて、世界初の万国博の姿を再現している。

Part 2「シドナムの水晶宮—民衆教育と娯楽の殿堂」では、ロンドン南郊シドナム丘陵に移設・増築された水晶宮とそれに附設された各種施設について述べられる。1854 年に開館した新・水晶宮は、世界各地の国、地域、歴史を表象する芸術作品ほかさまざまな展示物で満たされた巨大な美術展示館、博物館、ホールであり、所蔵資料を活用した学術講演会やヘンデル・フェスティバルに代表されるような音楽行事が開催された。屋外には絶滅動物の模型がならぶ池や植栽で整備された公園と大噴水のある庭園

がつくられ、教育と娯楽が融合するレクリエーション施設として多くの来場者を集めた。ただ、1866年の火事や20世紀初頭の運営会社の破産などシドナムの水晶宮はたびたび災難に見舞われ、ついには1936年の火事で全焼、その姿を消したのであった。

Part3からは、五一年万博の理念を継承し発展させる試みとして開催された博覧会がとりあげられる。まずPart3「マンチェスター美術名宝博覧会」では、五一年万博から1862年の国際博覧会に連なる「ヴィクトリア時代における博覧会の連鎖」(114頁)を成す重要な博覧会として、1857年に開催された同博覧会に着目する。ロンドンやパリでの博覧会に刺激を受けたマンチェスターの実業家たちがその美術品コレクションを一所に集めて公開するという美術博覧会の開催計画は、彼ら自身の気前のよい資金協力と収集美術品の貸出、アルバート公など王族・貴族からの物心両面にわたる支援をえて実現されるに至った。同博覧会では、「ハーフォード・コレクション」や「スーラージュ・コレクション」といった美術品コレクションをはじめ大勢の蒐集家から提供された数々の美術品が、五一年万博での美術展示の欠如を埋め合わせんばかりの勢いでもって、水晶宮を彷彿とさせる外観の展示館に収められた。著者は、公式カタログや地元の新聞記事など多くの史資料を引用・参照しながら、作家と収集家の背景も含めてこれら展示物について丁寧に解説する。

Part4「一八六二年国際博覧会」で舞台はロンドンに戻る。この博覧会は、コール及び美術協会評議員をはじめとする彼の同調者が主導したことや、五一年万博王立委員会が万博後にサウス・ケンジントンに購入した土地で開催されたことから、一見すると五一年万博を直に継承するイベントにみえる。しかし、著者の指摘によれば、美術(絵画)展示を産業展示と等しく重視した点で、この博覧会はむしろ5年前のマンチェスター美術名宝博覧会を継承していた。そのうえで、イギリスの芸術家による作品(主に絵画)の大規模な展示について紹介するほか、アームストロング砲をめぐる話や日本からの出展及び幕末遣欧使節団の訪英についても詳説される。終盤ではこの博覧会を契機とした欧米での国際博覧会への日本の参加について触れて、次の日英博覧会に話をつないでいる。

Part5「日英博覧会 イン・ロンドン」では、1910年にロンドン西郊

シェパズ・ブッシュで開催された同博覧会がとりあげられる。対ロシア戦勝と日英同盟を背景に、日本が「大英帝国と肩を並べる同盟国」たることをアピールすべく開催されたこの博覧会について、開催までの経緯とりわけ博覧会開催にかかる日本側の積極的な姿勢に言及しながら、「日本歴史館」「東洋館」「美術の館」「日本庭園」「イギリスの美術部門」に着目して、それぞれの展示内容を紹介している。

以上、本書の内容をおおまかにたどってみた。19世紀後半から20世紀初頭にかけてイギリスで開催された4つの博覧会について、美術(絵画)に焦点を合わせつつもさまざまな展示を視野に入れてその特徴を描き出した本書は、旧著において水晶宮の華やかな物語を紡いだ著者による「ヴィクトリア朝」博覧会史の集大成といえる。そこでは、文学作品や美術品そのものだけでなく、それらを創作し、評価し、収集した人びとに関する豊富な知見が披瀝される。美術史の系譜、画家とパトロン、コレクターが織りなす人物模様、そして水晶宮に収められた品々をはじめとする展示物の来歴に関する著者の博識には脱帽するほかない。著者の専門領域の本丸たる文学作品の引用・解説はもとより、各博覧会の展示物に関する詳細な叙述は、評者がコメントできる範囲を超えている。規模の大きな博覧会の公式資料や展示品カタログはいずれも膨大なデータの集成であり、それを読み解き、整理し、解説するには並外れた能力、労力、時間を要する。評者自身ささやかな体験からそのことを知っているだけに、原資料をもとに各博覧会の展示物を丹念にたどった本書には、博覧会史研究にとりくむ学徒にとって模範となる点がいくつもみいだせる。

そのいっぽうでいささか首をかしげざるをえない点もないわけではない。まず、はたして「大英帝国博覧会の歴史」というタイトルが本書にふさわしいかどうか、である。本書カバーには“A History of the British Empire Exhibitions”とも記されている。“A History”と言われればそうかもしれない。ヴィクトリア朝イギリス社会の特徴を色濃く映しだす(と著者が考える)博覧会に焦点をあわせた本書に対して、戦間期の英帝国博覧会 British Empire Exhibition(1924、25年)や帝国博覧会 Empire Exhibition, Scotland(1938年)をもちだすのは、たんなる言いがかりだろう。しかし、「植民地・インド博覧会」(1886年)、あるいは1895年からアール

ズ・コートで開催された帝國的な趣向をこらした博覧会はどうだろうか。
 Part4 Chapter 8 で言及される 1870 年代の博覧会シリーズの「失敗」後、
 同じ敷地で 1880 年代に開催された一連の博覧会のひとつとして、五一年
 万博以来「ワンマン」ぶりを存分に発揮したコールが去ったあと—いわ
 ば「コール以後」—の博覧会として、さらにはイギリスにおける帝国をメ
 インテーマとする初の博覧会として、植民地・インド博覧会は注目に値す
 る。¹ またアールズ・コートでの博覧会は、キラルフィが、長らく手がけて
 きたスペクタクル劇—そこではインドやアフリカなど帝国・植民地を舞台
 とするストーリーが演じられた—に博覧会という教育的要素を組み合わ
 せることで、世紀末ロンドンの娯楽シーンに新たなコマを加えたといえる。
 五一年万博王立委員会の敷地で開催される博覧会とキラルフィ
 による博覧会事業はその性格を大きく異にするとはいえ、いづれも大英帝
 国の博覧会としてヴィクトリア朝ロンドンでインパクトをもつイベントで
 あったことに違いはない。また、日英博覧会について言えば、「博覧会
 の歴史」として五一年、
 五七年、六二年の博覧会と日英博覧会をつなぐ糸ないし意図が浅学の評者
 には今ひとつ理解できなかったうえに、いくつかの点で同博覧会やキラルフィ
 にかかる本書の叙述やアプローチが気になった。評者自身の知見でもっ
 て指摘できるのは、キラルフィを「ハンガリーのブダペストに生まれたユダヤ
 系の企業家」(212 頁)とすることは幼少の頃からダンサーないし音楽エン
 ターテイナーとして舞台に立ち、のちにスペクタクル劇を手がけるようになった
 彼のエンターテイナーとしての長い経歴にそぐわないこと、とくに彼が博覧
 会に直接かかわるようになるのは 1890 年代にロンドン博覧会会社を設
 立してからのことであり「1883 年にシカゴ万博を成功させ…」(vi 頁)や
 「1867 年にパリ万博との出会いを機に…」(212 頁)といった叙述は読者
 に誤解を与えかねないこと、あるいは Part5 Chapter1 冒頭(同頁)のホワイト
 シティ・スタジアム(競技場)を眺める一節がいつの話なのか不明確なこと
 (同競技場は一九八五年に取り壊された)など、些末な事柄にすぎない。
 いっぽう、日英博覧会に関しては、1990 年代末以降 A・ホッタ＝リスター
 や伊藤真実子をはじめとする内外の研究者による研究成果が公にされてい
 る。² それらの研究によって明らかにされ

た日英博覧会の姿を知る者の目には、本書が描く同博覧会のイメージはどう映るだろうか。たとえば本書 Part5 と伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』第5章を読み比べたとき、日英博覧会の姿は大きく異なったイメージでとらえられるかもしれない。本書が展示物のありよう、来歴、系譜の解説に重きを置いているとはいえ、そうした展示を含めて「博覧会がどう見られていたか」ということは軽視できまい。「グレート・ホワイト・シティの会場案内図」の見出し“Under the Auspices...”(vi 頁、218 頁)には、著者が指摘するような日本側の「思い入れ」だけではなく、「見世物イベント兼遊園地という世評を覆すべく箔をつけたい」というキラルフィ側の意向が透けてみえる。五一年、五七年、六二年の博覧会与キラルフィの博覧会をつないで論じるからには、そこにみいだせる差異はもっと強調されるべきだったのではないだろうか。

もっとも、先行研究のことを言えば前 3 者の博覧会についても然り、とりわけ五一年万博については日英博覧会とは比較にならないほど多数にのぼる研究が近年も続々と現れている。つまるところ、本書が「大英帝国博覧会の歴史」ではなく「大英帝国に誇りと自信をもっていたとされる時代のイギリスにおける4つの博覧会の物語」だとすれば、上述のような評者の指摘はすべての外れだろう。翻って言えば、やはり本書の魅力や強みは著者の文学・美術に関する博識に根ざした同時代文献の「読み解き」にあると考えるべきかもしれない。さすればこそ、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてのイギリスにおける博覧会を探ろうとするとき一旧著『水晶宮物語』に親しんだ者もあらためて一本書は一読の価値ありと思われる。

注

- 1 拙稿「植民地・インド博覧会(一八八六年)とイギリス帝国『人文科学研究』(高知大学人文学部人間文化学科)8号、2001年;同「19世紀後半イギリスにおける博覧会と「もてなし」—博覧会にみるホスピタリティとしての娯楽的要素—」『女性歴史文化研究所紀要』16号、2007年。
- 2 A. Hotta=Ister, *The Japan-British Exhibition of 1910: Gateway to the Island Empire of the East*, Japan Library, 1999; 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008年。後者161-162頁には同書執筆時までの先行研究が簡潔にまとめられている。